

保育者養成校における実習指導の改善に関する調査研究

—短期大学 2 年次教育実習 II 実施後のアンケートをもとに—

中野 真樹・采澤 陽子・茂木 克浩

An Investigative Research on the improvement of Practical training at Childcare Educational Institution

—Based on the questionnaire after the second-year junior college teaching practice II—

Maki NAKANO, Yoko UNEZAWA, Katsuhiko MOGI

Abstract

This study investigates and analyzes students' preparation status for childcare training and teaching training at childcare training schools, as well as their sense of difficulty and sense of accomplishment after completing the training. In recent years, the values and work styles of childcare students have changed, and that their academic abilities have become more diverse. There has been an increase in the number of students who express an intense sense of difficulty in practical training or are unable to complete practical training. Therefore, it is time to reexamine the conventional way of training support. Therefore, we conducted a questionnaire survey on students immediately after completing their teaching practicum II to find out how their preparation status and proficiency in childcare skills such as the piano were related to students' sense of difficulty and accomplishment after the practicum. We will clarify this and consider ways to improve training support at childcare training schools.

Keywords: childcare educational institution, teaching practice, questionnaire survey

はじめに

本研究は、保育者養成校における保育実習・教育実習に際しての学生の準備状況および実習終了後の困難感、達成感を調査・分析する。近年、学生の価値観や働き方に対する意識の変化、学力の多様化が言われているなかで、実習に強い困難感をうったえたり実習を完遂させられなかったりする学生が増加傾向にあると感じられ、実習支援も従来のあり方を点検する時期にあると言える。そこで、教育実習 II 終了直後の学生に質問調査紙でのアンケートを行い、事前の準備状況やピアノ等保育技術の習熟度が学生の実習後の困難感・達成感にどのように関連しているのか明らかにし、保育者養成校の実習支援の改善点を検討していく。

1. 研究の目的と背景

足利短期大学は地域の保育・幼児教育の発展のため、足利市内およびその周辺の幼稚園・保育所・こども園の保育者および足利市行政とともに保育と保育者養成を研究する場である「足利幼児研究会」を設置している。令和 4・5 年度は「保育者養成校の実習について」という研究テーマで近隣の保育者および足利短期大学の教員が実習指導についての調査・検討を行った（采澤 2024）。また、学生の実習がどのように行われているのか、それに対して学生がどのように感じているのかという学生の視点を調査する目的で令和 4 年 6 月に実施された教育実習終了後のアンケート調査を行い、その結果を示した（中野

2024)。その調査結果を受けて実習受け入れ先の保育者と養成校教員が意見交換を行うなかでそれぞれの工夫・実習指導の改善すべき点などを確認した。そのなかで特に実習日誌を記述することへの学生の困難感に着目し、研究部員で協議を行い令和5年度に実習日誌の改訂を行った(茂木 2024)。

本研究は、この足利幼児研究会での検討結果をふまえ、さらに令和5年度に行った学生アンケートの結果を合わせて示しつつ保育者養成校における実習支援について考察していく。

保育者養成校における実習に関する先行研究は多岐にわたり、多くある。小島(2012)は「子どもが好き」という理由で保育者養成校に入学した学生が、少子化により実際に乳幼児とふれあう機会も少ないなか、専門科目を学んだり大学生活や実習を経験したりすることで「子どもと遊んでいるだけではだめなんだ」と気づき自分の将来に不安をおぼえていく近年の傾向について述べている(小島 2012: 157)。そして学生への保育観や保育者像に関する質問紙調査によるアンケートを分析し、2年制短期大学の学生にとって、実習を経験することで子ども理解や自らの保育者像の明確化を促進するという結果を示し、保育者養成校における実習の重要性を指摘している。そして、学生の実習の充実のために「学生が自ら自覚して学ぶ」ことができるような実習事前・事後指導が必要であると提案している(同: 163)。近年の学生の基礎学力、精神性、社会性、主体性と幼稚園教育実習における実習不安の関係を調査した本田・桜井(2011)では、多様な学生が実習に臨む際に感じる実習不安について個々の学生に対応した心理的な支援の必要性を指摘する。実習中に学生が体験した困難について考察した片岡(2020)では、学生は子どもへの指導に関する困難感を多く感じていて、その対応のために実習前指導に実践的な内容を取り入れる等の対応を保育者養成校が行っていくことが必要だと提言している。このほか、「子どもへの対応」以外で学生が実習に際して不安や困難感を訴えるのは、一日責任実習とそのための指導案の作成、ピアノ、実習記録・実習日誌の記述等がある。責任実習のための指導案作成についての研究には菜原・小林(2017)があり、ここでも保育者養成校が責任実習や指導案の作成の目的や意義を事前学習等において学生に伝えていくことが必要であると述べている。ピアノについては、栃木県のピアノ課題曲と学生指導について調査・考察した石塚・岡泉(2013)があ

る。保育者養成校の実習において実習記録・実習日誌記述の困難感の訴えがしばしば学生からなされることや、実際の日誌の記述内容に課題が多く残るといった先行研究を受けて、2年制短期大学の教育実習IIで書かれた実際の実習日誌の記述内容を調査した(中野・塚越 2017)。その結果、日誌記述の不備には「誤字・脱字」「話し言葉を書く」といった基礎的な日本語力の問題以外に専門科目の知識・技術定着や学生の保育観・こども観の養成が実習開始時までには十分ではないことも原因となっていることを示し、複数人の異なる専門性を持った教員が連携して実習支援のありかたを工夫していくことが有用であろうと指摘した。このほかに実習記録の「気づき」の記述の困難さに着目した榎本(2017a)や学生へのインタビューを行った榎本(2017b)が参考となる。

また、実習全体の学生の自己評価や保育者養成校の実習指導のありかたについて学生へのアンケート調査等をもとに検討した佐藤・阿部(2016)や菜原(2023)がある。

このように、保育者養成校における実習は学生の専門性や保育観・職業観に大きく影響するものであり、その実習の事前・事後指導が重要となることが多くの先行研究でも指摘されている。そして2022年12月の中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の構築～」では、大学の教員養成においても「教育実習」等の在り方の見直しが盛り込まれている。保育者養成校の幼稚園教育実習においても、これまで経験の蓄積のなかでおこなわれてきた実習のありかたが見直しの時期に来ているといえるだろう。本学でも学生の価値観や働き方に対する意識の変化、学力の多様化が言われているなかで、実習に強い困難感をうったえたり実習を完遂させられなかったりする学生が増加傾向にあると感じられ、実習支援も従来のあり方を点検する時期にある。

本研究では、学生にアンケートを取り実習開始時の学生の準備状況が実習終了後の達成感・困難感にどのように関係しているのか考察し、実習時の指導・支援法の改善点を検討していくことを目的とする。

2. 研究方法

1) 足利短期大学の实習について

足利短期大学では2年間で幼稚園2種免許状および保育士資格を取得するカリキュラム編成となっている。免許・資格取得のために学生は計5回の実習を行う。実習期間は表1のとおりとなる。

実習に先立ち「幼稚園」「保育園」「施設」で実習体験学習を行っている。今回の調査では2年次生6月の「教育実習Ⅱ」終了後に実習に関するアンケートを行った。1年次で幼稚園・保育園・施設でそれぞれ1回ずつ実習を経験し、2年次生となって3週間の幼稚園実習を終えた学生は8月の保育実習を控え、また将来の進路を検討する時期でもあり保育についての内省が深まっていると思われるため、この時期にアンケートを行った。

表-1 短大の実習状況

学年	実習種別 / 〈必修・選択〉		実習時期 (期間)
1年次	保育実習Ⅰ 〈必修〉	保育所	2月初旬から (11日間)
1年次		施設	3月初旬から (11日間)
2年次	保育実習Ⅱ・Ⅲ 〈選択必修〉		8月中旬から (11日間)
1年次	教育実習Ⅰ		11月中旬から (1週間)
2年次	教育実習Ⅱ		6月上旬から (3週間)

2) 調査方法と対象

足利短期大学2年次生のうち、留年者および教育実習Ⅰ・Ⅱ未実施もしくは未完了のものを除いたものを調査対象とし、googleフォームを用いた質問紙形式の調査を行った。調査は足利短期大学倫理審査を受けた後、回答者の匿名化して行ったため回答者や実習先等の情報については特定されないようになっている。アンケートの質問項目は、実習生の進路希望・ピアノ・日誌・指導案・責任実習について、事前の準備状況、実習を終えての所感についての質問であり、46項目となった。回答は44名から得られた。

3) 研究の倫理的配慮について

アンケート調査にあたり、足利大学倫理審査会に

て審査を受けた後に実施した。研究の目的、収集したデータの保管方法・期間、研究成果の公開方法、アンケートの内容や収集した情報を第三者に知られることがないこと、研究目的以外には使用しないこと、アンケートに回答したことによる一切の不利益を被らないことを口頭と書面で説明し、調査協力の同意書を書面で取り交わした。

3. 結果のまとめと考察

前述のとおり、令和4年の学生アンケート結果については中野(2024)で示してあるので、ここでは令和5年度の学生アンケートの結果を中心に示しつつ、前年度のアンケート結果との比較や実習受け入れ先の保育者からの意見を参照しつつ、考察していくこととする。

1) 学生進路希望について

教育実習Ⅱ終了直後の学生進路希望は保育者(幼稚園・保育園・こども園)を希望する学生が87%であり、施設が9%、一般企業が4%であり、令和4年度と大きな傾向は変わらず免許・資格を生かして保育者や施設職員を進路に選ぶ学生が大半であった。

2) ピアノについて

実習でのピアノの実施に関するアンケート結果は以下のとおりである。大学入学前からのピアノの経験については、短大での授業のみ31%、習っている期間の合計が2年未満が16%で、未経験者・初心者が半数近くいる(表-2)。そしてピアノが得意かという質問に対しては、ふつうという回答が31%で一番多く、不得意が20%、やや不得意が18%と苦手意識を持つ学生は4割程度であった(表-3)。未経験者や初心者の状態で入学した学生の多くが苦手意識を持ったまま実習に臨んだというわけではないが、ピアノの経験年数とピアノの苦手意識はおおよそ関連しているといえるだろう。なお、令和4年度のアンケート結果と比較すると、令和4年度は未経験者・初心者の割合が合わせて65%と過半数を超えていた。それに関連してピアノが不得意・やや不得意と答えた学生は58%となっている。やはりピアノの未経験者・初心者の状態で入学した学生は2年次の教育実習Ⅱの時点でもピアノに苦手意識を持っている傾向が見られることがわかる。

実習中に弾いたピアノ曲の曲数は園ごとの差はあるが、だいたい5曲から10曲の間という回答が多くみられた。0曲という回答や、1～2曲という回答も少数ながらあり、逆に20曲以上弾いたと答える学生が2名いた(表-4)。令和4年度と比較するとほぼ同様の傾向が見られ、園ごとの差が大きいものの、5～10曲という回答が多かった。楽譜をもらった時期についても昨年と同様の傾向が見られ、実習開始の1か月前には受け取っていることが多い。実習生がピアノの練習をする時間をとれるよう、実習園から配慮されていることがわかる。しかし、楽譜をもらえなかった、実習開始後にもらったという回答も少数あり、令和5年度はもらえなかったという回答が5人、実習開始後という回答が2名からあった。このうち、「もらえなかった」に関しては卒業生が多く就職する園では足利短期大学で使われているピアノの教科書と同じ楽譜を園でも使用しているため、別に園から楽譜を配布する必要がない場合もあるとのことであった。

表-2 ピアノを何年習っていますか

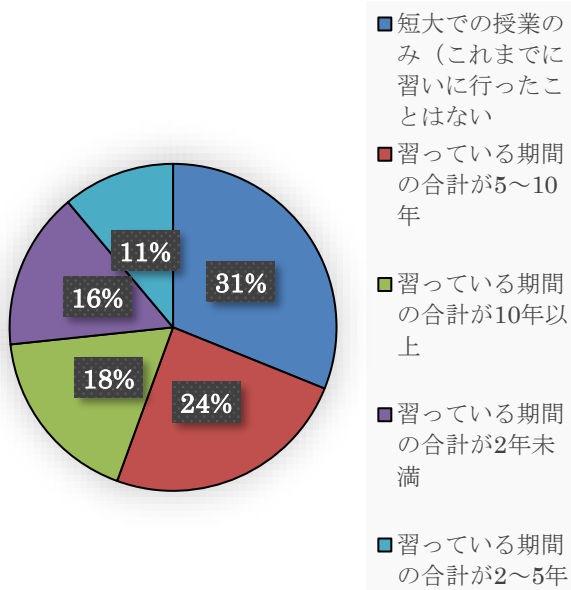


表-3 ピアノが得意ですか?

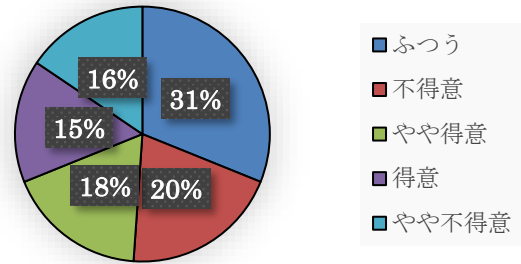


表-4 実習中に弾いた曲数

実習中に弾いた曲数	人数
5曲	9人
7曲	6人
4曲	4人
8曲	4人
9曲	3人
10曲	3人
3曲	2人
6曲	2人
1曲	2人
12曲	1人
20曲	1人
13曲	1人
25曲	1人
2曲	1人
0曲	1人
11曲	1人

実際にどのような曲を弾いたのか自由記述で回答を求めたところ、「おはよう」「おかえりのうた」「おべんとう」「給食のうた」などの生活の歌や「かたつむり」「とけいのうた」「かえるのうた」「大きな古時計」「雨の遊園地」「すてきなパパ」「すいかの名産地」「アイスクリームのうた」「七夕」といった6月や梅雨、夏にかかわる季節の歌が多くあがった。そのなかで、「大きな栗の木の下で」や「お正月」を弾いたという学生が1名いたが、匿名によるアンケートのため詳細は不明である。また、足利という土地柄「のんのののさま」「いまささぐ」「ののさまに」などの仏教歌も目立つ。これは2006～2012年にかけて調査を行った石塚・岡泉(2013)でも同様に指摘されている。

実習用にもらった楽譜をすべて弾けるようになって

たかという質問に対して、「問題なく両手で弾けた」という回答が 68%、「両手で弾けない曲があった」という回答が 20%であった。それ以外に「まったく弾けなかった」「1 曲だけ引けた」「左手は弾けるようにアレンジした」「実習中に少しずつ練習した」などピアノに苦戦した様子の回答もあり、「実習中にピアノを弾いていない」という回答が 1 名からあった。半数近くが未経験者・初心者でありながら 7 割近くの学生が実習時には両手でもらった楽譜の曲をすべて弾けるようになってきていることがこの結果からわかる。多くの学生がピアノを弾けるようになっていとも考えられるが、ピアノに関する自由記述の意見・感想には、実習時のピアノの大変さ、困難感を訴えるものが目立つ。後述するが実習時のピアノがうまく弾けないことで実習中断を検討する学生もいることを考えると「7 割ができていいるのだから」と楽観視はせずに、実習におけるピアノのありかたについて検討していく必要があるだろう。

実習受け入れ園のピアノに関する教育観や方針はさまざまであり、それは実習中に学生が弾いたピアノ曲の数に大きな差があり、25 曲をマスターして弾いた学生もいれば、「実習中に一度もピアノを弾かなかった」という学生がいることからもうかがえる。

自由記述には、そのほかにも子どもの前でピアノを弾く喜びや、練習していく中で上達していく楽しさ、演奏することの奥深さや自身の課題について書かれているものもあり、苦手意識もありつつも前向きにピアノに取り組む姿も見られた。以下にすべての自由記述を紹介する。

- ・ 5 曲以上出さないでほしい
- ・ 苦手だけど泣きながら頑張った
- ・ ピアノの練習もあり、日誌もあって辛かった
- ・ 電子ピアノの鍵盤の軽さや幅が違かったので弾きにくかった
- ・ 自分から楽譜をくださいと伝えない限り貰えなかった。また、「楽譜持ってないの？それでいいんだけど」と少し嫌な顔をされた。
- ・ 園によっておはようの歌がアレンジされていたりもらった楽譜通りにやると先生方のアレンジがされていて違う曲を弾いているんじゃないかなと思ってしまうことが沢山ありました。おはようやおひるやおかえりの歌は全部の園で同じ曲にしてもらおうと練習もしやすいし違う園にいても弾けるのではと思いました。

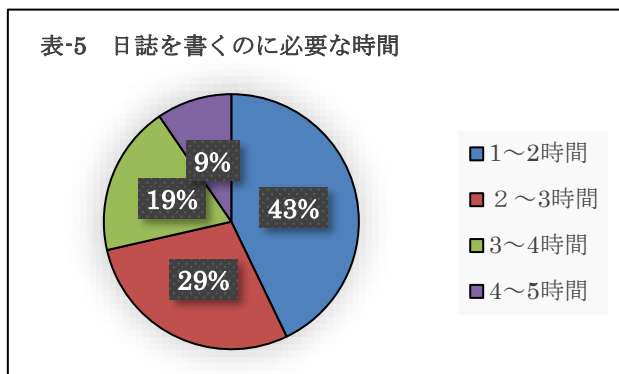
- ・ 先生によってアレンジがあるため正確なものが分からない。
- ・ 保育者によってテンポが異なっていたり、中には弾かない部分があったりなど元々貰っていた楽譜を完璧に弾ければ良いというものではなかった。
- ・ ピアノを子どもたちの前で弾くことが初めてだったため、とても良い経験になり、学びになった。
- ・ 楽譜をもらってからずっと練習したら、自信を持って両手で弾けてピアノが楽しくなった。
- ・ 園独自の前奏などがあり実習開始してから保育者に教えてもらった。
- ・ 元々習っていたのでスムーズに弾くことができたが、やっぱり初日は緊張して引っかかってしまうことがあった
- ・ 初心者からだとなんか難しかった。継続的に弾くことで弾けるようになった。弾けない曲が弾けるようになるのは嬉しかった。

実習時までには学生がピアノを弾けるように指導するというのも大切ではあるが、もともと保育における音楽表現とはピアノの弾き歌いにかぎらず幅広いものである。本学のカリキュラムでは幼稚園教諭免許状の取得にはピアノは必修科目とはなっていない。また、実際に実習中に一度もピアノを弾かない園があるということも本アンケート調査からわかっている。石塚・岡泉(2013:79)では「(栃木県の幼稚園では)就職試験時には必ずと言っていい程ピアノの実技を求められる園も存在する」とあるが、現在では就職試験にピアノの実技を課す園は一部に限られている。ピアノに大きな困難感をおぼえる学生については、養成校の教員が「教育実習ではピアノを弾けなければならない」という思い込みを一度念頭から外して、ピアノを弾かない園やあまりピアノを弾かない園と実習先や就職先をマッチングさせていくなどの工夫が必要になっていくのではないだろうか。

3) 日誌について

日誌の提出状況について尋ねたところ、期日通り提出したという回答が 93%となっていた。令和 4 年度の調査は 90%であったので、ほぼ同様にほとんどの学生が日誌を期日通りに提出していることがわかる。また、日誌を書くための所要時間をたずねたところ、1~2 時間程度 43%、2~3 時間程度 29%となっていた(表 5)。昨年度は 2~3 時間程度が 23%、1~2

時間程度が 11%であったので、時間短縮している。



これは、足利幼児研究会研究部会の検討を経て、令和5年度の教育実習Ⅱから日誌の改訂が行われたことと関係しているのではないかと推測される。日誌の書き方や添削を受けての訂正の仕方が明文化され、環境構成図の書き方にも変更があり、実習園にも足利短期大学の日誌指導方針が伝わりやすく、学生も書きやすいものとなったために全体的に日誌を書くための時間が減ったのではないかと推測される。しかしながら日誌の記入に4~5時間かかっているとの回答も9%あり、また日誌に関する自由記述には「大変だった」という記載もあり、また「前の形式の方が書きやすかった」などの意見もあり、今後日誌についてはさらに検討して行く必要を感じる。

「毎日同じ所は省略してもよい」という記述があるが、令和5年は実習に向けた授業の中で、実習課題に関する部分を詳細に記述し、毎日繰り返される活動については見出しなどだけでよいという指導を行った。ただし学生の中には、何をどの程度省略してよいのか判断するのが難しく、結果的に1日の流れを網羅的に記述したものもいたようである。実習園に配布した日誌指導方針の中に「本日の実習課題に関する部分については詳細を記入し、どのような場面で課題が達成されたのかがわかるように記録する。複数回設定された活動(例えば毎日行われる朝の会や帰りの会、給食の指導等)については見出しのみなど簡略に書くなど工夫をし、原則として1枚に収まるように心がける。」(茂木 2024)という説明を掲載していたが、現実問題としてそれがどの程度共有され実習生の指導に活かされたのかは不明である。また日誌を指導する保育者自身が、日々の記録を1日の流れを記録するものと捉えている場合、短大から伝えた「本日の実習課題に関する部分を詳細に記述する」という書き方がイメージできず、結果的に学生への指導に対応できないということも考えられる。日誌の記述のなかで学生が困難さを感じた点は、時

系列の「日々の記録」が一番多く、40%となっていた。「こどもの気づき」が28%、「保育者の気づき」が21%とそれに続く。この傾向は令和4年度の調査結果と同様となっていた。実習園から指導を受けた点は、「誤字脱字」「ことばの表現」「記述不足」「記述のあやまりや不適切さの指摘」が中心となっている。この傾向も昨年度と同様であり、日本語表現に課題があることがわかる。日誌についての自己評価としては、「よく書けた」21%、「だいたいよく書けた」26%、「ふつう」41%、「あまりよく書けなかった」12%であり、おおむね書けたと感じる学生が多いが困難感を覚える学生もいた。以下に載せた日誌に関する自由記述からは、日誌改定が行われたことで改善された部分もある一方で、日々の記録の視点、実習中のメモの可否、実習時間内での記述時間の有無等、まだまだ改善する余地があることが伺える。

- ・毎日同じ所は省略しても良いと思います。
- ・毎日同じで短縮して書くと学校では言われたけど結局1日の流れを書いてしまうと毎日同じ日誌になったり日誌を書いている時間にもっと子ども達と触れ合える気がしたので感想程度で今日の出来事をまとめるぐらいでいいのかなと思いました。
- ・日誌の書き方が変わってより書きやすくなった
- ・なるべく1枚に納めようと思い書いたが、指摘が多く、日誌は6枚程書いた。もっと少なくなると寝る時間ができてありがたいと思った
- ・ほんとに日誌が死にそうで徹夜しまくって寝れなかった
- ・メモなるべく取らないでと言われた際に日々の記録が書けなくなる。
- ・日誌を持ち帰りだと負担が大きいので園で書く時間をもらえるとありがたい。
- ・提出日を翌日にして欲しい
- ・1日行ったことを時系列に書く時にほぼ同じことが多かったので同じことを毎日書くのが大変だった。書き直しはあまりなかったのでそこは楽だった。
- ・園によって形式が違う
- ・前の日誌の形式のほうが良かった
- ・毎日書いていく中でだんだん慣れ、日に日にスムーズにかけられるようになった。
- ・とにかく苦手で時間がかかった。
- ・大変だった

4) 保育技術について

絵本の読み聞かせの回数の調査は、表6のとおりである。絵本の読み聞かせは盛んに行われ、毎日取り組んでいる学生が多くいることがわかった。一方、紙芝居の上演回数は表7となるが、0回という回答が20名と最も多く、それ以外の回答でも上演回数は少ない。紙芝居は実習においてはあまり活用されていない。しかし、15回と毎日取り組んでいる学生も2名いて、園の方針か本人の希望によるものなのか今後調査を継続していきたい。実習前には絵本と紙芝居の特性の違いやクラスサイズを考慮して適切に教材を選択することを教え、実際にどちらも披露できるように演習を行っているが、実習の場では絵本に人気があるようである。

手遊びの実施回数について質問したところ、盛んに行われていることが表8からわかる。15回と毎日行っているという回答が一番多く、15回以上行っているという回答も複数ある。一方、0回という回答も1名からあった。

上記以外の活動は、パネルシアター(2名)、エプロンシアター(2名)、レクリエーション(1名)、スケッチブックシアター(1名)を行ったという回答があった。

保育技術の披露についてはピアノと同様に個人の経験に差が大きく出ることが明らかとなった。

表-6 絵本の読み聞かせの回数

絵本の読み聞かせを何回行いましたか?	人数
15回	17人
10回	5人
20回	4人
5回	3人
6回	3人
9回	3人
11回	2人
14回	2人
8回	1人
2回	1人
0回	1人

表-7 紙芝居の上演回数

紙芝居を何回行いましたか?	人数
0回	20人

1回	7人
2回	6人
15回	2人
6回	1人
5回	1人
3回	1人

表-8 手遊びの実施回数

手遊びを何回行いましたか?	人数
15回	15人
10回	5人
3回	3人
11回	3人
6回	2人
20回	2人
16回	2人
30回	1人
19回	1人
17回	1人
14回	1人
12回	1人
9回	1人
8回	1人
7回	1人
5回	1人
0回	1人

5) 指導案・一日責任実習について

指導案については、足利短大ではワードファイルの雛形を配布しPCでの作成を推奨しているが、実習先の方針によっては手書きでの提出が求められる場合があり、その場合は園の方針に従うように指導をしている。実際の作成方法について調べたところ、実習先への指導案を手書きで書いている学生が42%、PCで作成している学生が58%であった。昨年度の結果では手書きが68%、PCでの作成が32%となっていて逆転してPCの割合が大幅に増えている。また、学生にどちらのほうが作りやすいか尋ねたところ、PCの方が作りやすいという回答が69%、手書きの方が作りやすいという回答が31%であった。文部科学省は「教育実習等におけるハラスメントの防止及びその適切な対応等について(通知)」(2023)の中で、教育実習等の適切な時間管理の方法として、ICTの積極的な活用を求めている。手書き

で指導案を作成した場合、修正するたびに一から書き直しが求められる。これは時間的にも、肉体的にも、精神的にも非常に負担がかかる作業である。指導案作成の目的は、子どもたちへの援助や活動を充実させることにある。指導案作成に PC を使用することで、手書きよりもかかる時間を削減できる。そうして生み出された時間を、活動の中身を吟味したり、準備をしたりすることに当てられるようになる。それは結果として実習に対する負担感軽減に結びつくと考えられる。

次に、指導案（全日、ゲーム、製作）をそれぞれ何本書いたのかをたずねた。全日指導案は 1～3 本という回答が多くあったが、実習中に前日指導案を全く書かなかったという回答が 2 名からあった。また、多いものでは 5 本、6 本と回答した学生がそれぞれ 1 名ずつであった。ゲームの指導案は、1 本という回答が 38%、0 本という回答が 35% でゲームの指導案を 1 度も書かなかった学生も多くいることがわかる。製作の指導案は、1 本という回答が 41% と多く、次いで 2 本が 23%、0 本が 17% となっていた。また、ゲームも制作も 5 本以上提出していた学生も数名いた。部分指導案はゲームより製作を選択する学生が多いことがわかる。この傾向は令和 4 年度のアンケート結果も同様であった。過去には、責任実習を運動遊びでやりたいと申し出たところ、園から製作でやってほしいと言われたという実習生もいた。製作の方が手順が明確であり、具体的な援助もイメージしやすい。また椅子に座って行う場合が多く、ハサミ等の使い方に気をつけさえすれば、身体接触等による怪我のリスクも低い。そのため実習生にとっても、実習生を指導する保育者にとっても取り組みやすい活動であることが予想できる。ただし見本を提示し、それに向けて手順通りに製作していくことが、本当に子どもたちの豊かな表現を生んでいるのかについては再度検討が必要な部分である。このほかの活動として、絵本の読み聞かせや配慮が必要な子どもへの配慮点をまとめた指導案を提出したという回答があった。

責任実習指導案を提出した日について尋ねたところ、実習初日が 42%、実習 2 週目前半が 32%、実習 1 週目後半が 17%、1 週目前半が 7% となっていた。実習の前半には多くの学生が責任実習の指導案を提出していることがわかった。特に実習初日に提出している学生が 4 割を超えていた。実習指導としては実際に子どもの姿を把握してから指導案を仕上げて

提出するようにという指導を行っているが、初日に提出しているのは実習園の方針によるものなのか追って調査をしていきたい。また、責任実習指導案が完成した時期についても質問したところ、2 週目後半 41%、2 週目前半 32% と、多くの学生が実習 2 週目には完成させていることがわかった。特筆すべきは、実習初日に完成させたという回答が 10% あり、初日に提出した指導案を手直しをせずに責任実習に臨んでいる学生がいることがわかる。指導案を実習園の指定した期日通りに提出したかという質問に対しては、期日を守れなかったという回答はなく、期日通りに提出したという回答が 90%、一部遅れてしまったという回答が 10% であった。この傾向は令和 4 年度の調査結果ともほぼ一致する。指導案記述の自己評価としては、「だいたいよく書けた」44%、「ふつう」34%、「よく書けた」22% となり、自己評価は高かった。指導案の記述に関しての自由記述は以下のとおりとなる。

- ・園、先生によって書き方が変わるから難しい
- ・園からもらった指導案だったためあまり詳しく書かなかった。
- ・学校で何回か書いていたので内容を考えるのはとても大変でしたが全体の指導案を書く時は練習してきたことを活かしながら書くことが出来た。
- ・環境構成は作ってもかきなおしになるため、後で記入した方がいい
- ・指導案は保育者と一緒に考えて子どもの様子を保育者から聞きながらやるのも一つの案だと思いました。
- ・実習初日に指導案を出すと指定されるが環境構成がわからない。
- ・責任実習を行うクラスは、オリエンテーションまでに教えてほしい。
- ・枠から手書きで 3 枚書かされた。寝る時間がなかった。
- ・いらないところは全部教えて欲しい

責任実習を行ったのは実習開始日から何日目かを質問したところ、13 日目 30%、14 日目 15%、10 日目 15%、11 日目 10%、12 日目 10%、15 日目 10% と第 3 週に集中していた。もっとも早かったのが実習開始から 2 日目という学生が 1 名いた。責任実習について大変だったことを質問したところ、製作の準備、特に人数分の材料をそろえることが大変であ

ったという回答が多かった。また、その製作の材料を自費で購入するため経済的な負担があると答えた学生が1名いた。製作に必要な素材を人数分揃えるのは保育者の仕事と言える。一方、教材費を実習生が負担することについては再考の余地がある。そもそも実習生が行うとはいえ、園での活動であることには変わらない。そのように考えれば実習園が教材費を負担するのは自然なことである。また現状だと実習生の経済力によって、希望する活動が行えないことになる。自らの懐事情を気にすることなく、心置きなく実習に臨める環境を保証するという視点で考えれば、送り出す側である養成機関が負担するのが自然なことなのかもしれない。その他、指導案の作成や子どもの名前の把握が大変であったという回答が複数名からあった。これらの傾向も令和4年度の調査結果とほぼ同様であった。

指導案通りに責任実習を行えたかという質問をしたところ、「だいたい指導案の通りだった」49%、「指導案通りではない所が多くあった」41%、指導案通りに進んだ10%という結果が出た。

指導案通りに進まなかった理由については、素材や道具の不足・準備忘れ(4名)、時間配分がうまくいかなかった(4名)、子どもとの意思疎通がうまくいかなかった(6名)、担当した子どもには簡単すぎた(1名)、難しすぎた(3名)などの反省結果が得られた。

責任実習についての自由記述は以下のとおりである。

- ・教育実習に関しては、授業内でも指導案の添削を先生がやってくれたので園にもスムーズに出すことが出来たので良かった。
- ・緊張しすぎた
- ・子どもの前で自分の考えた製作を行い、子どもたちに楽しんでもらえたことがすごく嬉しかったです。
- ・準備不足が目立ってしまった
- ・寝る時間がない。自分の力量を考えて行うべきだった。魚を120作るのが大変だった。
- ・保育実習の時はリトミックを行ったのですが、結構動くものだったので子供たちに疲れが出てきて水分補給の時間を作るなど臨機応変に対応することができた
- ・保育者になれるのか不安になってしまいました

子どもたちに楽しんでもらって嬉しいという意見と、うまくいかなかったという不安感の両方の意見があった。うまくいかなかったという意見のなかにも自分の反省点を明確にして今後の目標を設定する前向きな姿勢がうかがえるものと、保育者になれるか不安になったという自分の保育者の適性について迷う記述が見られた。

実習生が初めての責任実習を指導案通りに進められないことは当然ありうることで、時間配分や子どもへの対応、思わぬトラブルの対応などの失敗を経て学ぶことも多くある。そこで必要以上に実習の評価を気にしたり、自らの資質を疑ってしまったりする学生がいるのであれば、養成校の教職員がフォローをしていく必要があるだろう。一方、教材の準備など実習にあたって当然できていなければならないことができていなくて失敗してしまうことは避けられる失敗であるということも伝え、悔いのない実習となるよう学生指導をしていくことの大切さを感じた。

6) 子どもたちや教職員とのかかわりについて

子どもたちとの関わりについては、88%が積極的に声をかけて関わるが多かったという回答であった。昨年度も約9割の学生が積極的に関わったと回答していた。子どもとかかわることが楽しい、子どもと接することが好きというのは、保育者として一番大切と言っても過言ではない資質である。多くの実習生が、積極的に子どもとかかれたという結果は、その資質があると解釈できるのではないかと考える。子どもたちとのかかわり方への自らの課題については以下のような自由記述があった。これを見ると、子どもたちと接する中で、様々な課題を発見したことがわかる。これも、子どもたちと積極的にかかわったことによって見出された、一つの学びの結果といえるのではないだろうか。

- ・その子が何が好きなのかをもっと観察しより深く子供たちとかかわる。
- ・たくさん声をかける
- ・とにかく子どもの話を聞いてあげる
- ・ひとりひとりに寄り添うことを意識してしまい、全体への対応が不十分になってしまうこと。
- ・やってはいけないことを注意する時に「ダメだよ」だけではなく明確な理由をつけて説明する必要がある

- ・一人一人の特性を知る
- ・見守る、介入を使い分ける
- ・言葉の語尾
- ・言葉遣い
- ・子どもたちに寄り添いながら声掛けをする
- ・子どもたちの様子を見て動く
- ・子どもと親しんで安心させられるような関わり
- ・子どもの気持ちを汲み取る
- ・自分から実習生に声かけられない子どもとあまり関われなかった
- ・自分の周りに子どもが複数人いる場合、公平な援助ができないこと。
- ・受け身になってしまうことが多くある
- ・笑顔で子どもと接する
- ・積極的に遊びを楽しむ
- ・特別支援が必要な子どもへの対応
- ・配慮が必要な子供への声掛け、
- ・名前を覚えることが苦手で、名前を呼んであげることあげられない子の差が開いてしまった。
- ・話し方やダメなことをした時の対応の方法

実習先の教職員へのコミュニケーションについては、85%が報告・連絡や質問・相談ができたと答えていた。自らの課題については以下の自由記述があった。

- ・積極的に質問をする（6名）
- ・報連相をしっかりとる（2名）
- ・言葉遣いを注意する

教職員への質問が積極的にできなかったという反省が多くあった。筆者らが実習訪問指導で園に伺った際に、保育者側から「もっと積極的に質問してほしい」「せっかくの機会なので遠慮なく声をかけてほしい」という意見が寄せられることがある。その一方で実習生からは「いつ質問すればいいかわからない」「忙しそうにしているので声をかけづらい」という声も聞く。つまり質問できなかったのは、ただ単純に実習生の意欲の問題ではなく、システムの問題と考えることができる。例えば保育者の「いつでも質問していいよ」という発言は、一見すると質問の機会を実習生に広く開いているように聞こえる。しかしそのタイミングの判断を、保育者の状況を把握しきれない実習生に委ねるのは親切とは言えない。ましてや保育者が忙しそうにしている様子を目の当

たりにしている実習生にとって、自分のために時間を割いてもらうことを躊躇する気持ちも理解できる。仮にもし毎日「質問できる時間」を明確に設定してあれば、このような悩みを改善することが可能ではないだろうか。このように、質問してほしいのにしてもらえない保育者と、質問したいのにできない実習生のズレを、意欲の問題としてしまうのではなく、実習のシステムの問題として扱うことで、うまく解決に導くことができるのではないかと考える。

また2年次の教育実習Ⅱということで、学生は保育者として働く自分の姿がより具体的に想像できる時期ではあるとはいえ、「必ずなにか質問をしなければならぬ」「必ず気づきを書かなければならぬ」という要求は実習生の学びとどのようにつながっているのか、実は明確にはできていない部分もあるように感じられる。子ども・保育者同士・保護者・地域の人々等、さまざまな人々との連携を必要とする仕事である保育者にはコミュニケーション力は必要なスキルである。またそのための言語能力も必要となってくるだろう。実習はそれらの力を養う貴重な機会であるが、一方、実習中の学びや気づきは多岐にわたるものであり、実習中のその日、その瞬間にどれほどの学生が完璧に言語化できるものなのだろうか。帰宅して日誌を書く中で振り返ったり、実習が終わり授業のなかで「そういえば」と学びと実習を結びつける瞬間があったり、または数年後、保育者として働く中で実習中の出来事について思い出し気づきを得る場合だってあるだろう。「気づき」「感想」「質問」を実習中に過度に要求することによるプレッシャーのかかった学生が教員や実習指導担当者が気に入るような表層的な言葉を選び、口にしたり紙面に残してしまうこともあるだろう。そしてそれに学生自身も満足し、それ以上考察を深めたり広げていったりする機会を失ってしまっているのではないかとこの危惧もある。「早くしなさい、なぜできないのですか」「今できなくては大めです」というように教員の都合で実習指導やその評価を行うばかりではなく果実が熟するのを待つように学生の思考が熟するのを待ち、自然にそれが表出できるようになればいつでも耳を傾ける姿勢と機会を実習後も持ち続けることが養成校教員には必要とされるのではない。実習指導は事前指導と事後指導に終始するものではない。実習後も何度でも実習の振り返りをしたいと学生が思えるような学習環境を整えていくこと、そして場合によってはリカレント教育の一環として

卒業後も地域で保育者として働く卒業生の話聞き、相談に乗り、保育について協議・学習するような生涯学習の場としての役割も保育者養成校には要求されていくこととなるのだろう。

7) 実習の目的と期待

学生にどのような目的をもって実習に臨んだのか、自由記述で解答を求めたところ、以下の意見があった。

- ・保育者を目指すため
- ・幼稚園教諭の免許を取るために
- ・見学実習とは違った気づきや学びを得られるように望んだ
- ・責任実習に向けて実践を頑張る
- ・責任実習や部分実習をすることで自分が保育者としてどのように保育を展開することができるか
- ・責任実習を後悔なく終わる
- ・学校で学べなかったものを学ぶ
- ・知識を広げる。学びを深める。
- ・経験を積む
- ・自分が保育の立場に立てるように
- ・自分のスキルアップ
- ・現場を見る
- ・園の教育方針や保育者の様々な保育のあり方を知りたいと思った。
- ・職員の仕事を知る
- ・保育者の行動や言動の意図を理解する。
- ・子どもに信頼されるような明るい雰囲気でのぞんだ
- ・こどもとの接し方
- ・子供とたくさん関わる
- ・様々な子どもに対して関わり方を学ぶ
- ・自分の子どもに対するわかりやすい関わり方や広い視点で保育をみることができるようになっていた
- ・実際に保育者になったつもりで実習を行った
- ・生きること、最後までやり遂げる
- ・保育者としての技術を身につける、子どもとの関わりを楽しむ
- ・保育者と子どもの関わり方を学ぶため

実習にどのようなことを期待したかという質問には以下の回答があった。

- ・資格を取ること

- ・スキルを身につける
- ・スキルを上げるためにどんなことがあるか
- ・経験を積む
- ・たくさん子どもと関わり、現場での生活に対しての理解を深める。
- ・どんなことがあるか楽しみだった
- ・学校だけで経験できないことや学べないことを知る
- ・去年も関わった子どもたちともう一度関わる事が出来、より子どもの成長を見ることが出来ることに期待した。
- ・現場の雰囲気と仕事
- ・実習を通して、その園で働くことが出来るかを考えられるかどうか
- ・憧れの保育者像を見つける
- ・保育者としての技術の習得、子どもとの関わり
- ・子どもとの関わり
- ・子どもとの関わり、保育者の保育技術を学ぶため
- ・子どもへの保育者の援助方法を学ぶ
- ・子どもを知る
- ・子供たちが名前を覚えてくれているところ
- ・子供たちと楽しくかかわること

実習にどのような目的と期待を持っていたかという質問に関しては、免許・資格を取得するために必要だからという意見の他に、短大での学びを生かしてさらに保育の知識やスキルを深めたいという向学心や子どもとかかわりへの期待、実際の保育の場や職務について知りたいという意見があった。

8) 準備状況と体調管理について

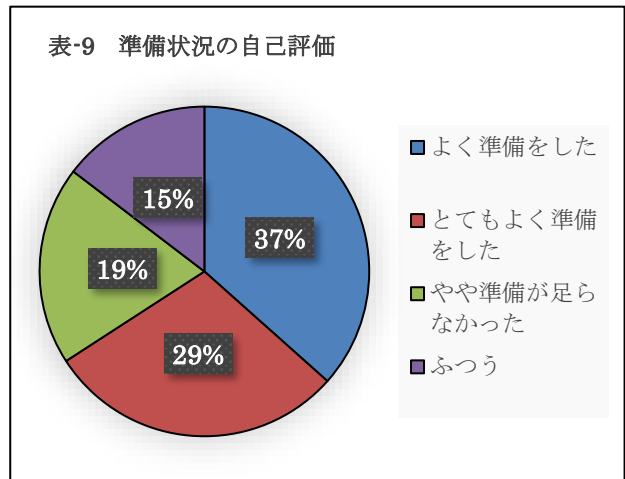
学生の準備状況と実習中の体調管理については以下の結果となった。自己評価については、「よく準備をした」という回答が一番多く、37%であった。(表-9) 体調管理については、問題がなかったと答えた学生が81%であった。

実習中に何らかのストレスを感じた学生が56%ほどいた。その内容とどのように乗り越えたかについて尋ねた。昨年度は責任実習、ピアノ、日誌記述など具体的に困難感を感じた点を答える回答が多かったが、今年度はそれに加えて「実習そのものが苦痛」「環境に慣れなかった」という漠然とした回答が目立つ。子どもとの関わりや実習先の保育者との関係に悩む声もあった。

- ・慣れないところでの緊張
- ・環境に慣れない、常に騒音な環境が辛かった
- ・子どもと関わることが体力的に辛い、慣れない環境の精神的負担
- ・保育者からのプレッシャー
- ・保育者同士の話しや毎朝7時には保育園に向かうこと保育者に気を使うこと
- ・自信がなくなり、実習が辛く感じた。土日で体を休めて気分転換
- ・実習自体が鬱、先生たちに気を使う
- ・期間が終われば自由と考えた
- ・ピアノや責任実習の緊張、不安。やれば終わると思って乗り越えた
- ・日誌
- ・日誌を細かく、隙間なく書くこと
- ・実習日誌。できるだけ早い時間に終わらす。メモを多めにとる。
- ・1日の責任実習を行える気がしないプレッシャー。とにかく、時間は過ぎるものだと思ってやりすごしていた。
- ・責任実習、やるしかない
- ・責任実習の準備が終わらず、毎日3時間睡眠だった。
- ・睡眠不足
- ・他の人に手伝ってもらい、終わらせた。
- ・全部

また、実習を途中で辞めたいとおもったことはあったかを質問したところ、46%の学生が「あった」と回答した。その理由をたずねたところ、実習日誌8名、指導案5名、保育者との関わり5名、ピアノ4名という回答があった。ピアノ、日誌、指導案それぞれについて個別で質問すると「できた」という回答が多くあるが、困難感を覚えた学生にとっては実習の中断を検討するほどに深刻なものとなることがあること、そしてそれをもとに実習の中断を検討した学生が半数近くいることがわかる。

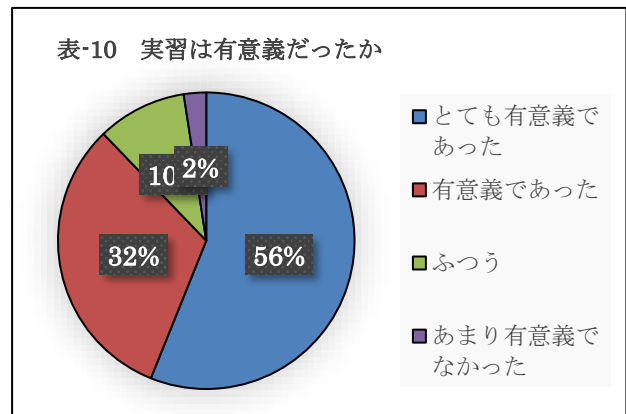
表-9 準備状況の自己評価



9) 実習を振り返って

実習を振り返り、有意義なものであったかをたずねたところ、「とても有意義であった」「有意義であった」と答えたものが合わせて9割程度であった(表-10)。

表-10 実習は有意義だったか



実習前後で保育に関する考え方について質問したところ、自由記述で以下のとおりの回答があった。

- ・できるかどうか不安になってしまった
- ・まだ、保育所実習が終わるまでは分からないなど感じていた。
- ・授業で学んだこと以外の学びが多く得られた
- ・もっと頑張ろうと思った!
- ・やっぱりやり甲斐がある職業だなと感じた
- ・一人一人みんな違い、対応も変えていかなくてはいけない。
- ・教員としての意識が強くなった
- ・支援しすぎても子どものためにならない
- ・言葉で示すだけでなく、環境で子どもに伝えることも必要

- ・自信になった
- ・自分がしたい保育の形が分かってきた。
- ・自分のしたい保育が分かり、就職の際の園選びに役立った
- ・保育士になりたい
- ・保育者との関わりかたを学べた
- ・保育者の凄さを実感した

実習に行くことで職業意識ややりたい保育、理想の保育者像が明確となり、保育者になりたいという気持ちが強まっているということがわかった。それと同時に保育の難しさに気づくことで自身の課題と目標が明らかになる学生や、逆に「自分には保育者は難しいのではないか」と進路に迷う学生がいることがわかった。

最後に実習中に保育者の言動や行動で疑問や違和感を覚えたことがあったかと尋ねたところ、「ある」と答えたのは33%であった。その内容を自由記述形式で尋ねたところ、以下の回答があった。

- ・給食で途中でデザートを食べた子を叱っていた。途中で食べても、その他をしっかりと食べるのであれば途中で食べても良いのではないのかと思った。
- ・子どもが何かできなかつたとき「そういうとこだよね」って言ってたところ
- ・男女でわけていた。物をこぼしたことを指摘していた。疲れているせい子供と関わる時冷たかった。
- ・適切でない言葉がけを行っていた
- ・保育観の違い、主体性の尊重
- ・保育者ができないところを自分にも注意してきた。できてから、注意して欲しい

昨年度は保育者同士の関係性などに関する意見もあったが、今年度は子どもへの接し方に対する意見が多くあった。これらの意見は実習時に見た学生からの一方的な言い分であり、これまでの子どもとの関係性等については考察が足りないという場合もあるだろう。しかしながら、食育に関する考え方やジェンダー観についての自身の保育観を持ち、葛藤していることがわかる。

4. おわりに

教育実習Ⅱ終了直後の学生へのアンケート調査を

概観し、実習の内容や学生が個々に抱えるさまざまな困難感をおぼえていることがわかった。この結果は他の先行研究の調査結果と一致する部分が多い。一方、実習を振り返ると「有意義であった」という回答が9割近くあり、卒業後の進路にも資格を生かした職業を志望する学生が9割以上であった。保育者養成校の学生にとって各実習が学業にも進路選択にも大きな影響を与えていることが今回の調査からもうかがえる。

調査から、学生の一部は責任実習とその指導案記述、実習記録・日誌の記述そして、ピアノ等に非常に困難さを感じ、実習中断を検討するほどまでに苦悩している場合もあることがわかった。その説明として昨今の学生の基礎的な学力の低下、学習意欲のとぼしさ、社会性の未熟さなどが理由に上がることが多い。しかしながらこれを安易に「学生のせい」ととらえるのではなく、保育者養成のための実習指導上の課題と考え、今後の実習指導のありかたを模索していくことが必要である。前掲の「教育実習等におけるハラスメントの防止及びその適切な対応等について（通知）」（2023）では「万一、実習期間中に学生が、性暴力やセクシャルハラスメント、パワーハラスメント等の被害を受けるなど、学校現場において不適切な事案等が発生した場合のため、大学等は学生が直ちに相談できる窓口や連絡体制があることについて事前に周知を図ること。」という文言が盛り込まれている。これまでも学生が実習先の教職員との人間関係や子どもとも関係性について悩みを訴えたり、それによる実習中止を申し出てきたこともある。このとき養成校教員は学生の心の弱さや準備不足等の落ち度に困難感の原因を求めればかりであったが、この通知を受け、今後は学生の悩みを聞く相談窓口となり実習を継続できるよう調整を行っていくことが求められる。そして「教育実習等は学校所定の勤務時間の範囲内で行うこと」という文言もあり、実習時間外の日誌や指導案の記述についても過度な負担とならないように配慮していく必要があるだろう。

現在、世界の情勢は変化が激しい。保育についても見えにくくされてきた子どもの多様性を尊重し、これまで以上に一人一人の個性や背景を考慮しながら接していくことの重要性が説かれている。そして多文化共生、子どもの権利の尊重、ジェンダー観や働き方といった社会通念が急激に変化していくなかで、学生もさまざまに生き方を模索している最中で

あるといえるだろう。「男女でわかる」「給食指導」など、これまでの保育では「当たり前」のこととされてきたことを目の当たりにして自分なりの問題意識を持って葛藤していることがアンケートからもわかる。これまで保育者養成校ではこれらのことも「実習園の方針に従いなさい」と一律に指導してきて、学生の苦悩に寄り添えていない場合もあるだろう。

情報機器が発達し皆が一人一台スマートフォンを手にして世界各地と情報のやり取りを行うさなかに、髪の色を黒く染めることを強要され、寝る間を惜しんで手書きで実習日誌・指導案を書き、ピアノを必ず弾かなければ実習が完遂できない。そして実習前には「実習園に迷惑をかけないようにしっかりと実習準備を行う」ための指導が行われている。保育者養成校教員が世界と学生の意識の変化に気づかず、これまでの「子どもたちのために真面目に働く保育者」という価値観に固執し学生に強い緊張を強いてきたのではないかとこの調査およびそれを受けての足利幼児研究会の検討会のなかで浮かび上がってきた。

最後に、足利幼児研究会の研究部会で行われた議論を紹介し、今後の実習指導のありかたを考えるための材料としたい。

現職保育者の研究部員からは本アンケート調査の結果を受けて「学生が実習に対してこんなに困難感を感じていることに驚いた」「学生が極度に緊張して実習に臨んでいるために、伸び伸びと子どもと接することができていない」「保育者に対しても緊張のためか消極的で質問や感想を口に出さない」「日誌の書き方の形式にとらわれていて伸び伸びと疑問点や思ったことについて書けていないのではないか」「学生が日誌を書かなければと苦悩し、長時間取り組み睡眠時間を削られてしまい、実習に集中できなくなるのは本末転倒なのではないか」「まず、子どもたちと接するなかで実習を楽しんでほしい。それを通して保育者という職業のすばらしさに気づいてほしい」という趣旨の意見が多く出た。(それぞれの保育者の考えや思いについては、『足利幼児研究会 令和4・5年度研究部会報告書 保育者養成校の実習について』にまとめられている)

それらの意見を受けて今期(令和4・5年度)の研究部会では実習日誌の形式の改訂を行った。しかしながら、責任実習の意義とその指導法、実習になにを望むのか、学生が保育の視点を育てるためにはどうしたらよいのか、ピアノ等の保育技術への取り組

みについてという課題は残された。現職の保育者が実習の意義についてどのように捉え、実習生に対してどのようなことを望み、どのような視点で実習生の評価を行っているのかを知り、養成校教員がそれを受けて実習指導の改善をしていくことが必要であろう。今後、学生へのアンケートや聞き取りだけではなく、実習受け入れ先の指導者の意見を聞く機会を設け、実習園と保育者養成校が連携してよりよい実習指導のありかたを検討していきたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、足利幼児研究会令和4・5年度研究部会の研究部員である石川悦代先生(足利短期大学附属幼稚園)、岡田幸枝先生(足利幼稚園)、柏瀬泰子先生(羽刈保育所)、小島由香先生(小俣幼児生活団)、田中紀子先生(小俣幼児生活団)、時田香理先生(三重保育所)、野尻千絵子先生(羽刈保育所)、村松弘美先生(みなみ保育所)、渡邊朋嘉先生(東光寺幼稚園)よりさまざまな観点から多大なるご助言を頂いた。感謝の意を表するとともに本研究の成果を本学の実習指導に反映させ、今後の足利市の保育者養成に貢献していきたいと考える。(所属は執筆時のもの)

引用・参考文献

- 石塚将之・岡泉志のぶ(2013)「幼稚園実習におけるピアノ課題曲(生活の歌)資料～栃木県下の私立幼稚園を中心に～」『佐野短期大学研究紀要』第24号, pp.69-79
- 采澤陽子(2024)「研究の概要」『足利幼児研究会報告 No.16 保育者養成校の実習について』足利短期大学, pp.5-9
- 榎本眞実(2017a)「学生が感じる実習記録の困難さに関する一考察～「気づき」に着目して～」『東京家政大学教員養成教育推進室年報』第4号, pp.47-56, 20
- 榎本眞実(2017b)「学生が感じる実習記録の困難さに関する一考察～困難さが少なくなるプロセスに着目して～」『東京家政大学研究紀要』第57集, pp.19-30
- 片岡祥(2020)「保育職を目指す学生が実習中に体験する困難の内容」『滋賀文教短期大学紀要』22

巻,pp.83-92

小島千恵子 (2012)「保育者をめざす学生の「保育」の意識に関する研究：実習前後の自己意識の自覚の変化を中心に」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第34号,pp.157-167

佐藤慶子・阿部敬信 (2016)「幼稚園教育実習で学生が感じる困難に関する研究—幼稚園教育実習事後及び事前の自己評価アンケートの分析から—」『別府大学短期大学部紀要』第35号,pp.17-26

中野真樹・塚越亜希子 (2017)「幼稚園教育実習における「教育実習指導」と日本語表現科目との教科横断の必要性—実習日誌の記述指導を中心として—」『関東短期大学紀要』第59集,pp.30-41

中野真樹 (2024)「資料：教育実習Ⅱ終了後の学生意識調査報告」『足利幼児研究会報告 No.16 保育者養成校の実習について』足利短期大学, pp.10-21

菜原佳子,小林美花 (2017)「幼稚園教育実習・保育所実習における指導案の現状と課題」『北翔大学短期大学部研究紀』55巻,pp.139-145

本田潤子・櫻井登世子 (2011)「幼稚園教育実習における実習不安の類型とその特徴」『田園調布学園大学紀要』第6号,pp.49-60,2011

茂木克浩 (2024)「実習日誌の改訂について」『足利幼児研究会報告 No.16 保育者養成校の実習について』足利短期大学, pp.10-21

中央教育審議会答申「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の構築～（中間まとめ）」（2022年12月・文部科学省）

https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo16/mext_01239.html(2024年2月22日閲覧)

「教育実習等におけるハラスメントの防止およびその適切な対応等について（通知）」（2023年3月・文部科学省）

https://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/nc/mext_00073.html（2024年2月22日閲覧）

